すみだ史談　第５３号

新元号令和の時代

小木曽　清三

平成 31 年４月１日新元号が発表されました。248 番目の新元号は「令和」REIWA だそうです。平成 31 年５月１日天皇が即位され新元号令和の時代となります。

新元号が決まるには６つの候補案があったとのことです。メディア報道によると日本古典から「広至」「令和」「英弘」の３つ、中国古典から「万和」「久化」「万保」。最終投票は令和が７票、広至１票、英弘１票だったようです。令和は日本最古の和歌集・地位や身分に関係なく庶民の歌も載せた万葉集(4,500 首以上の収録 1200 年前の歌集)から、「令」は中心・リーダー、「和」は家族のまとまり。＝時に初春の令に気淑く風和らぎ＝からきたようです。外務省の海外発信は beutifull hamony（ビューティフルハーモニー）「人々が愛し心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」「悠久の歴史と四季折々の文化、次の時代に引き継ぐ」「桜の花のように日本人が明日への希望を咲かせる」とのことです。

暫くは５月１日以降になっても「平成」も併用してもいいとの事ですから幻の平成 31 年５月１日ということもありそうです。

元号は紀元前の中国「建元」ケンゲンからと言われていますが日本で最初の元号は「大化の改新」で有名な大化（タイカ）、645 年から 650 年頃との説もあります。

明治 22 年に一世一元制となりました。平成のときも修文(シュウブン)・正化(セイカ）の候補があったようです。何と言っても良かったのは戦争のない時代でした。今回も明治(meiji)、大正(taisho)、昭和(showa)、平成（heisei）の略字と使用されるＭ、Ｔ、Ｓ、Ｈの文字は敬遠されたのかもしれません。令でも令でも良い(文化庁）アクセント［レイ］イントネーションは自由とのことです。

今年は地方統一選挙、墨田区も区長、区議会選挙が４月 21 日に結果が出ました。区長には２期目の山本亨氏、すみだ史談会の名誉会長も引続きお願いして「すみだ」の発展に寄与していきたいと存じます。区議会議員も木内清会員、佐藤篤会員、井上ノエミ会員、渋田ちしゅう会員、藤崎こうき会員が当選されました。おめでとうございます。これからも誇りあるすみだを目指して共に頑張っていきたいと存じます。

産業観光プラザ すみだ まち処
すみだの産業、文化、歴史、観光、グルメ情報
東京スカイツリー土産
産業観光プラザ すみだ まち処
開始時間：１０：００～２１：００
年中無休　TEL　０３－６７９６－６３４１

旧制中学（府立、市立）と進学状況の要約

高木　新太郎

1．墨田区の後期中等教育（高校）の特徴

現在の高校は改革が進行中で、代表例は九段高校である。戦前は市立第一中学として 1924 年に設立され、新制高校では都立九段高校となり、2006 年に「千代田区立九段中等教育学校」となった。この変遷は、教育制度の変化が背景にあり、その歴史面と進学状況を述べたい。今回は第二次大戦前で、戦後は制度が大きく変わったため、次回に譲る。

現在の墨田区の都立高校は、㋐両国、㋑墨田川、㋒日本橋（2009 年に中央区から現在地に移転）、㋓本所が普通科で、㋔橘が産業科となる。これ以外に、都立養護学校がある。このうち㋐～㋒の３校が旧制中学に源流があり、都内最大の旧制中学が多い区である。旧制中学は 24 校予定していたが、23 校設立され、旧制中学がない区も複数以上あった。

㋔の設立経緯は当時の向島区の教育への熱意を示す。橘の母体は㋕向島商業と㋖向島工業で、両都立高校を統合した。㋕は 1935 年に「東京市向島女子商業学校（区立３年制）」として開校した。1943 年に修業年限を４ヶ年とし、都立に改称した。㋖は複雑である。1937 年に吾嬬製鋼所の社長が工業教育振興として 50 万円を東京市に寄付した。これを基金として 1938 年に東京市立向島工業学校（第一本科）が５年制工業学校で開校された。1943 年に第一本科と第二本科（1939 年）の修学年数を４年制とし、都立向島工業と改称した。向島区は吾嬬・寺島・隅田の３町が合併し、1932 年成立した区であった。官民挙げて教育に熱心だった事がわかる。

2．戦前の教育略史

⑴学校教育全体

・1872 年「学制」発布。山田恵吾編著『日本教育文化史を学ぶ』によれば“「学制」は、日本初の近代的公教育制度を想定した法令である”とし、約半年前に刊行された『学問のすゝめ』（1872 年）と比較した“「学制発布書」には「一国独立す」や「生まれながら貴賤上下に区別なく」といった『学問のすゝめ』のキーワードが無く、『学問のすゝめ』には無い民費負担や強制就学の構想があった”。

・1886 年　帝国大学令、師範学校令、中学校令、小学校令を勅令として公布。初代文部大臣の森有礼は学校制度の大改革を行なった“「学制」以来の主要な４つの学校を基本とする方針は、第二次大戦まで引き継がれたため、ここに日本の近代学校体系の基礎が確立したといえる”（山田編著）。

⑵初等教育の動向

・1900 年　第三次小学校令の公布。日本で初めて４年制の義務教育制度が確立し、授業料は原則廃止となった。1907 年に６年制となったが、1941 年に提案された“義務教育の８年制”は実現しなかった。

⑶中等教育制度

・1899 年　中学校令改正。実業学校令、高等女学校令の公布“1899 年は日本の中等教育制度史上重要な画期をなす年であった。（中略）男子の中学校、女子の高等女学校、そして実業学校の３種がそれぞれ独立の法令によって規定され、戦前の中等教育制度の３本柱が出揃ったのである”（片桐・木村編著『教育から見る日本の社会と歴史』）。ここに中等教育は多様化・複雑化した。特に、上への進学を制度上、保障されていたのは中学校であった。

3．旧制中学の状況

⑴対象の府立中学等の前提

ここでは府立中学と市立中学を対象とする。市立中学は市立一中（1924 年設立、後の九段高校）、市立二中（1924 年、上野）、市立三中（1940 年、文京）の３校である。

他方、府立は一中（日比谷）～二十三中（1943 年、大森）の 23 校あり、どの時点を採るかの判断が必要になる。1901 年７月から“中学校校名の「東京府」を「東京府立」と改め”た（岡田孝一『東京府立中学』）。同書等を参照し、設立年次を次のようにした。一中 1878 年、二中（立川）1901 年、三中（両国）1901 年、四中（戸山）1901 年までが明治時代の設立であった。五中（小石川）1919 年、六中（新宿）1922 年、七中（墨田川）1922 年、八中（小山台）1923 年、九中（北園）1928 年はほぼ大正期であった（九中は昭和初期）。十中（西、1937 年）以後は中等教育への需要が増加し、中学も急増した。要点は二つである。第一は十七中（1940 年）の扱いで、敷地の確保のみで校舎の建設は戦後だった。十七中の本流が葛飾野、亜流が日本橋となった。第二は、1940 年設立が８校と多いことだ。

⑵旧制中学の旧制高校への進学

第１の資料は岡田著からで、「飛び級＋現役」を対象にした高校入学者数（1928～37 年の年計とした）である。この期の高校入学は、一中（754 人）と四中（886 人）の争いであった。三中（234

（次頁に続く）

旧水路研究ノート

六間堀はいつ誕生したか
―検証・万治開削説―

旧水路ラボ

一．六間堀とは

墨田区には隅田川を初め、多くの水辺がありますが、かつてはもっとたくさんの川や堀があり、数百年もの間、重要なインフラとして人々の暮らしを支えていました。

六間堀もその一つで、墨田区の南から江東区へと流れた、幅一一メートルほどの水路です。堀及びその周辺は、松尾芭蕉や尾形乾山、伊東深水等のゆかりの地として知られ、江戸前寿司発祥の地の一つでもあります。ただ、残念ながら、六間堀そのものの知名度は高くなく、研究も進んでいないため、誕生から終焉に至るまで、謎多き水路になっています。本稿では、そういった謎を解明する第一歩として、六間堀の誕生時期に関する従来の説を検討し、問題点を探ってみたいと思います。

二．万治開削説

六間堀の成立については、万治年間（一六六〇年前後）の本所開発で開削されたとよく言われます。『墨田区史』や『墨田誌考』の他、『御府内備考』や『葛西志』といった文政期（一八二〇年前後）の幕府関係の文献でもこの説が採用されており、長年、通説的地位を保ってきたようです。

三．万治説に対する疑問

しかし、万治開削説には、いくつもの疑問点があります。

（一）分郷六間堀　『町方書上』の深川海辺大工町の項によれば、慶長元（一五九六）年に深川村分郷六間堀が成立しています。これに従うなら、本所開発の六〇年以上前から「六間堀」という名が存在していたことになり、万治説とは矛盾しそうです。

新板江戸外絵図（寛文五枚図の一部、寛文一一（一六七一）年）に加筆

（二）堀の形状

本所開発では、竪川や横川等が造られましたが、それらは街路に合わせて直流しています。しかし、六間堀は、隅田川に沿うように曲流しており、計画的に造成されたにしては不自然な流路になっています。

（三）周辺の道

寛文五枚図を見ると、堀の南側に、蛇行した道が確認できます。本所北部の区割からも分かるように、本所開発の時点で既に存在していた集落は、区画整理が行われず、不規則な街区のままにされました。六間堀南部も古くから村落があったため、蛇行した道が残ったと考えられます。このような場所に堀を通すとは考えにくいですが、もし村落を貫く形で堀を開削したのなら、元からあった東西方向の道は堀によって分断されたはずです。しかし、そういった道は見当たりません。

このように、万治説には不可解な点が多く、むしろ、もっと前から六間堀は存在していたと考える方が合理的です。

四．『本所深川起立』の解釈

さらに、万治説の論拠となっている『本所深川起立』の記述も、実はすっきりしない書きぶりになっています。すなわち、「竪川を上口二十間敷十四間深さ一丈四尺ニ掘立其後横川十間川六間堀をも右深さに準じ掘」という記述は、確かに、竪川と同時期に開削されたとも読めますが、元からあった水路を一丈四尺まで掘っただけとも読める書き方なのです。横川や十間川も、元々その辺りに自然河川があったと言われていることを踏まえれば、後者の読み方も十分成り立つように思います。

五．まとめ

以上から、六間堀の誕生は万治年間よりも遡る可能性が高いと考えられます。具体的にいつ、どのようにして誕生したのかについては、紙幅が尽きましたので、稿を改めて論じることにします

（前頁より）

人）と七中（202人）は余り差が無く、かつ人数も多くなかった。市立一中（263人）、私立の開成（553人）・麻布（330人）はそれなりに健闘した。

第2の資料は小林著『東大合格高校盛衰史』で、旧制一高入学者（浪人を含む）である（1934～42年の年計）。ダントツの首位は一中（430人）だった。三中（120人）と七中（22人）との差は歴然であった。

西山幸一郎さんのこと

史談会理事　阿部洋一

西山幸一郎さんは、当すみだ史談会の副会長を長く務められました。そして、それ以上に、西山さんは墨田区を代表する職人さんでした。押し絵羽子板の「成駒屋」さんで、鴻月（こうげつ）を雅号とされていました。

墨田区伝統工芸保存会を立ち上げ、初代会長として区内の伝統工芸界の発展に尽くすだけでなく、日本全国に伝統工芸の保存活動を活発化させる起爆剤となられた方でした。アメリカのディズニーランドで初めて日本の繊細で優れた工芸技能を紹介し、日本の工芸技術の源である中国との技巧交流にも貢献されました。

その功績で、日本文化研究で有名なドナルド・キーンさんと一緒に名誉都民となり、続いて、世界のホームラン王・王貞治さんと共に、鴻月さんは墨田区の名誉区民となられました。

三十一年前、私は、同じ町内に住むというご縁で、西山さんに誘われ史談会の設立総会に参加しました。つまり、創立以来の会員という訳です。ちょっと自慢にしています。

ある晩、西山さんが我が家を訪ねられ、これを見てほしいと言われました。拝見すると、職人の目から見た世相、時流への感懐、工芸世界への提言など多方面に渡る内容の、貴重な随筆でした。文筆の専門家ではありませんので、若干の手直しが必要でした。そんな作業が何度か繰り返され、ついに西山さんはこれを出版されることとなりました。出版に当たっては、やはり史談会の重鎮であった「下町タイムス」の発行者・今泉清さんのお力添えがあったと聞いています。お読みになった方も多いと存じますが、「風のしがらみ」というタイトルです。

羽子板職人である西山さんが有名人になると、マスコミ関係者が「西山先生」と呼ぶようになりました。西山さんはこれが大嫌いでした。私どもは一介の職人であって、芸術家ではございませんと、たしなめられました。この言葉は、墨田区の伝統工芸の世界で、今も生き続けているのではないでしょうか。そして、絵筆を持つ手に僅かでも震えが来たら私は仕事を辞めます、というのも、西山さんの口癖でした。言葉通り、ある日、すっぱりと引退されました。

今は、息子さんが「鴻月」を継いで、立派な二代目となっておいでです。

平成三十年度 すみだ史談会の一年

① 五月二十日（日）定期総会
三十周年記念式典・祝賀会
東武ホテルレバント東京　吉野間

② 七月十五日（日）史跡探訪
下町すみだの文化財
墨田区文化振興財団主任学芸員
五味　和之氏

③ 九月九日（日）講演会
百花園を訪れた文人墨客
向島百花園八代目　佐原　滋元氏

④ 十一月十一日（日）史跡探訪
下町すみだの文化財
墨田区文化振興財団主任学芸員
五味　和之氏

⑤ 一月六日（日）史跡探訪
日本橋七福神巡り

⑥ 二月十七日（日）研究発表会
・旧制中学の大学進学等の変遷
高木　新太郎氏
・暗渠と六間掘り　中村　太郎氏
・昭和初期の下町の風情
小木曽　清三氏

【新入会員】

松本　一夫　様　【太平】

【編集後記】

新元号の発表、区長・区議会選挙があり世間は騒がしくしています。会員の区議さんの活躍を期待します。

この機関誌は年二回、四月と十月に発行しています。

すみだ史談五十三号
平成三十一年四月一日　印刷発行
墨田区吾妻橋一―二三―二〇
教育委員会文化財内
発行人　小木曽　清三

夢を夢で終わらせない信用金庫
東京東信用金庫